

## 「野宮」の文体

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7201">http://hdl.handle.net/2297/7201</a>

# 『野宮』の文体

西村 聡

『野宮』は、確証のないまま、長く世阿弥の作とされてきた。「文章の巧みさからみて、世阿弥以外の作家ではあり得ない」と思われた(田中允)からである。

ところがその名文も、「終始原作からの引用にうずめられているために、作家の文体が顔を出さずひまがないくらいがある」(香西精)そうした「原典依存」の強さが、世阿弥作説を疑わせることになる。「作者不明、伝世阿弥作とでもいうほかはあるまい」とした香西説に続いて、伊藤正義が「禪竹作の可能性」を示唆し、これには、『源氏物語』に「密着」した引用が世阿弥の主張と相違するという八島正治も従った。

同じ観点で、最近では「素人」説も出ている。「土俗的・民俗的な」「従来の伝統的な芸術的側面を払拭しているように見える」(石黒吉次郎)からである。また、『浮舟』などとともに、『源氏物語』の本文、和歌、寄合語のいずれをも用いた「点」が、「いかにも知識人の手になる作風」であるともいわれる(竹本幹夫)。一方、小西甚一は、「あまりにも複雑微妙な情趣を詞章でこまかに書きあらわしてしま」っている点が、「統一イメージがわりあい単純な」世阿弥らしくなく、といつてその志向する美は「きわめて世阿弥的」で、「禪竹ではありえない」ので、世阿弥グループのうち、「作風の違う」元雅を消去して、残った元能の作かと推定した。

このように、『野宮』の研究史においては、作者考定の根拠として詞章の特質、とくに本説となった『源氏物語』からの「書承」(八島)性が論じら

れてきた。作者説は、新しい外証が発見されないかぎり、これ以上の進展はむずかしいかもしれない。しかし、詞章に関しては、『源氏物語』とどの程度「密着」しているのか(あるいは、していないのか)、より正確に把握するためには、何度でも点検されてよいと思う。本稿では、物語の多様な視点が夢幻能のシテに集中して読み換えられていく実態を明らかにするなど、いくつか私見による問題点を整理することで、その試みに加わりたい。

## 一 『物語』語彙の点綴

日本古典文学大系『謡曲集下』にならって、この曲を十段に分かつと(以下、詞章の引用も同書による)、第一段のワキの名のり、及び第二段のシテの登場部分には、『源氏物語』本文からの直接の引用が認められない。しいて挙げれば、「黒木の鳥居小柴垣」がそれに当たるが、『物語』によらずとも野宮の神域を示すには欠せない、象徴的な景物である。この二語のみ採り上げるのなら、『物語』との直接的な関係は問題にならない。しかし、この二語が、他の類似する性格の語群と響き合うとき、換起される『物語』世界それ自身が、総体として引用されることになる。

秋の花<sup>①</sup>……小・異・光・事・連

浅芽が原……小・異・光・事・連

虫の声……小・異・光・事・連

松風……………光・連

小柴垣……………小・異・(光)・事・連

板屋……………光・連

黒木の鳥居……………小・異・光・事・連

火焚き屋……………光・連

夕月夜……………小・異・事・連

榊……………光・連

松虫……………小・異・事

①河内本・別本系『源氏物語』及び梗概書・寄合書は多く「秋の草」。

②「うらはかき」。

\*略称は次のとおり。

小…『源氏小鏡』(武田孝『源氏小鏡高井家本』(教育出版センター)による)。

異…『源氏小鏡』(片桐洋一『異本源氏こかがみ』(和泉書院)による)。

光…『光源氏一部連歌寄合』(岡見正雄『良基連歌論集三』(古典文庫)による)。

庫…による)。

事…『光源氏一部連歌寄合之事』(同右)。

連…『連珠合壁集』(木藤・重松『連歌論集一』(三弥井書店)による)。

\*『野宮』に使用された『源氏物語』語彙のうち、賢木卷(野宮の段)中ものを、『物語』に出る順に掲げ、梗概書・寄合書のそれとどの程度一致するかを示した。梗概書・寄合書に採られ、『野宮』に採られない主な語彙には、

物の音・大垣・神官・注連の外・簀子・月も入りぬるにや(入方

の月)

などがあり、(野宮の段)の後日譚になるが、第四段(クセ)の、

柱のおん抜ひ・鈴鹿川・八十瀬の波・伊勢までたれか

なども重要な寄合語である。

曲中各所にちりばめられたこうした語句が、同時代の梗概書や寄合書のたぐいに、「野宮トアラバ」あるいは「の、みやいせなどに付べし」などとして、賢木卷から抽出されている事実は、これらが『源氏物語』享受の鍵語―読者にはいわば常識的な語彙であったことを確認させ、それとともにこれらの引用を前提としないで『野宮』の世界を構成することの不可能を思わせる。おそらく、引用を意識する以前に、引用は必然であった。

それだけに、使用語彙の量的な分析から、原典との距離(「密着」度)をはかること、もしくはいずれの梗概書・寄合書を経由しているかといった議論、は無意味である。文脈から切り取られ、自立して存在した単位が、『物語』の残像を洩きながら、どのように能のあたらしい文脈を構成するか、が問われなければならないだろう。

## 二 前シテの造型

秋の嵯峨野を観光に訪れたワキ僧は、「野の宮の旧跡」と教えられた森のたすまいを、「昔に変はらぬ有様なり」といふおかつている。かつてその眼で見た当時を「昔」というのではなく、後醍醐時代を最後に塵絶した野宮が(シテも三段で)「その後はこのこと絶えぬれども」と述べている。話に聞く「昔」の様子と違わないことに驚いているわけで、すなわちワキは、この能がつけられた室町時代に生きているのである。

そのワキが「心も澄める」という野宮の秋の夕べを、シテは「身を碎くな

る夕まぐれ」と承け、悲痛な面持ちで独白する。

花に慣れ来し野の宮の、  
秋より後はいかならん。折しもあれ  
物の淋しき秋暮れて、なほ萎り行く袖の露、身を砕くなる夕まぐれ、心  
の色はおのづから、千種の色に移ろひて、衰ふる身の慣らひかな。

「花に慣れ来し」の「花」は光源氏の愛を、「秋より後は」の「秋」は彼  
の「飽き」を、暗示させたとするのが通説であるが、御息所は忍び所の愛人  
にすぎず、男の訪れはまれであったから、「花」をそのように限定すると、  
「慣れ来し」がそぐわない。「妹背の心浅から」ず、彼女を春の花のように愛  
したのは、むしろ前坊と呼ばれる亡き夫であった（第四段（クリ））。もち  
ろん、その一方で、「秋」＝「飽き」が、源氏を待つ身の不安から発せられ  
ていることも、たしかであろう。前坊や源氏といった貴公子たちに愛された  
若い頃、——「花」はその程度に、ゆるやかに解すべきかもしれない。

それはともかく、「秋より後はいかならん」、あるいは「衰ふる身の慣らひ  
かな」という慨嘆は、御息所生前の発想にちがいない。同時に、死後数百年  
の今なお、「来てしもあらぬ仮の世に、行き帰る」亡霊の迷いを、正視する  
理性もはたらいっている。

この、生前・死後、二つの意識の混在は、すでに『井筒』において完成さ  
れた女体夢幻能に特徴的な手法であるが、『野宮』の作者もまた、シテの心  
象を映すともいえる晩秋の自然を織り込んで、美しい和歌的な詞章につづ  
てゆく。『源氏物語』からの引用はもろんのこと、引歌の指摘も知らない、  
たとえば第二段の（上ゲ哥）が、『閑吟集』に採録されるほど愛誦された事  
実は、作者の力量をうかがわせる。

どこからともなく忽然と現れた上品な女性に対して、「いかなる人」かと  
ワキが問う。あなたの方こそお名のりなさい——これが女の返事であった。  
どこの誰とも知れないお方がおいでになるには慣れがある。と——とお帰り

なさい、とけんもほろろの応対ぶり、遊山の僧をたじろがせる。このあた  
り、御息所の冷たく強い性格をやや誇張した造型と見え、「人こそ知らね」  
のくり返しには、他人の視線が気になるヒロイン意識を読みとらせようとす  
るかのてとくである。

このように、冒頭三段ほど（正確には第三段の前半まで）は、『源氏物語』  
を直接に引くことなく、しかし原典をよく消化し、様々な工夫も凝らされて、  
引用箇所とくらべて遜色がない詞章に仕上がっているように思われる（後段も  
同様）。

### 三 回想の生埋

『源氏物語』の言葉そのままの、長文の引用が最初に確認できるのは、  
「昔を思ひ給ふ、謂はれ」を問われた前シテが、次のように語り始める部分  
である。賢木巻の該当箇所と並記してくらべてみる。

〔源氏物語・賢木〕

…月ごろのつもりを、つきつきしう聞こえたまはむもまばゆきほどに  
りにければ、袖をいささか折りて持たまへりけるをさし入れて、「変ら  
ぬ色をしるるべにてこそ、斎垣も越えはべりにけれ。さも心うく」と、聞  
こえたまへば、

神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れるさかまぞ  
と聞こえたまへば、（源氏の返歌以下省略）……

（日本古典文学全集『源氏物語』による）

〔野宮〕

光源氏この所に詣で給ひしは、長月七日の日けふに当たれり、その時  
いささか持ち給ひし袖の枝を、忌垣の内に挿し置き給へば、御息所とりあ

へず、神垣は、しるしの杉もなきものを、いかに紛へて折れる櫛ぞと、詠み給ひしも、けふぞかし

どれほど「昔」のことになるのか、九月七日の今日、光源氏がここ野宮に参詣した。『源氏物語』には、来訪に至る経緯や対面の模様を叙述するが、能ではないきなりクライマックス（巻名はここに由来し、梗概書・寄合書も多くこの歌へ及び源氏の返歌）のみを掲出する）に触れ、櫛の枝をめぐる和歌の贈答をもって、懐旧の「謂はれ」とする。

この飛躍は、観客の知識への信頼というより、三人称をよそおいつつ、実は自己の体験を語る前シテの、連想の生理であろう。里の女に徹するなら、「光源氏この所に詣で給ひしは」の句に訪問の相手御息所の名を入れ、御息所の詠には源氏の返歌をつがえさせたはずである。

一見同文的な両者の間には、そうした微妙な出入りを指摘でき、それがどの程度作者の意図した改変なのか、即断しえないにせよ、里の女と御息所と交錯した二つの意識が読みとれそうである。前シテの懐旧は、語り始めたはじめから、亡霊の正体をつつみきれていないことになる。

傍線部を比較すると、源氏や御息所に対する語り手の敬意であった『物語』の「たまふ」は、そのまま前シテの敬意に重なり、「御息所とりあへず、…と、詠み給ひし」と自己をもその対象としている。この点では、里の女の立場をくずしていない。

しかし、源氏来訪を回想するのに、『物語』では「けり」が用いられた波線部が、『野宮』になると「き」に変わる。野宮廃絶後の室町現代からする時間的遠さが、里の女としての前シテに、直接体験したはずのないできごとを、読者の常で『物語』内に感情移入し、目撃者の眼で事象化したと見るべきか、「き」によって回想させている。もちろん、御息所の当事者として『経路回想』とも読めよう。こんなところにも、前シテの両義性が浮かび

上がってくる。

#### 四 御息所への視点の集中

右のように、『源氏物語』の語り手の視線を前シテに移行させるとともに、『野宮』では、光源氏の心中をも、御息所の思惟に転用する例が、いくつも見える。その一つは、すでに大系（補注九五）等に指摘された、第四段（クセ）の冒頭である。

〔源氏物語・賢木〕

…いとど御心のいとまなけれど、つらきものに思ひはたまひなむもいとほしく、人聞き情なくやと、思しおこして、野宮に参うでたまふ。…はるけき野辺を分け入りたまふよりいとものあはれなり。

〔野宮〕

辛きものには、さすがに思ひ果て給はず、遥けき野の宮に、分け入り給ふおん心、いとものあはれなりけりや、

源氏の野宮訪問は、御息所への同情と世間体への配慮からなされたときれた<sup>(1)</sup>積極的な、逢おうとする意志からの行動ではなかった。御息所が、自分のことを、つれない男だとあきらめてしまうのもいたわしく、重い腰を上げたのであった。

そのような源氏の心中を知らない御息所でもなかったらうが、行動にふみきつてくれたことへの感動が、「さすがに思ひ果てたまはず」と、彼の誠意を確認させる。すなわち、「思ひ果つ」の主語が、御息所から源氏へ転換し、それに伴って、その主体を見つめる人物も、源氏から御息所へと転換しているのである。

『物語』は、行動する源氏の心を通して語られ、『野宮』では待ち受ける

御息所の側から行動が評価される。御息所への視点の集中は、行動を促した源氏の「おん心」をたたえる「ものあはれ」の使用法にも見られ、この評語は、『物語』では、訪れた野宮の風情に対するものであった。同様に、「情を掛けてさまざまの、言葉の露もいろいろの、おん心の内ぞあはれなる」も、「月も入りぬるにや、あはれなる空をながめつつ、恨みきこえたまふに、こころ思ひあつめたまへるつらさも消えぬべし」という、夜半の空の風情に関する評語を転用したものである。

〔源氏物語・賢木〕

ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋どもあたりあたりいとかりそめなり。(中略)火焼屋かすかに光りて、人け少なくしめじめとして、ここにも思はしき人の、月日を隔てたまへらむほどを思しやるに、いといみじうあはれに心苦し。

〔野宮〕

ものはかなしや小柴垣、いと仮そめのおん住まひ、今も火焚屋の幽かなる、光はわが思ひ内にある、色や外に見えつらん、あら淋し宮所、あら淋しこの宮所。

第三段(上テ哥)から、もう一例示しておく。『物語』の地の文は、はるかに広がる嵯峨野の原を分け入り、しだいに御息所母子の住まいに近づく源氏の眼がカメラになって、「ものはかなげなる小柴垣」や「いとかりそめ」な「板屋ども」のたたずまいを映し出す。御息所の登場はこのあとのことである。

「小柴垣」や「板屋ども」は、源氏以外の人物が見ても、「ものはかなげ」で「いとかりそめ」な様子に見えたにちがいない。そのまま地謡に借用して、前シテの立場から、御息所の「住まひ」には「おん」を冠して、敬意が表されている。そこまでは、源氏の眼から御息所の眼に転換されたとはいえず、い

ちおう、前シテⅡ里の女が場面を客観しえている。

ところが、火焚屋のかすかな光に「もの思はしき人」Ⅱ御息所の苦悩を連想するのは、『物語』を踏襲しながら、それを見る人物が源氏から前シテに変わることによって、「光はわが思ひ」と、前シテは対象化された御息所との距離を失ってしまう。「あはれに心苦し」と同情する余裕はなくなり、「あら淋し」と自己の感情をくり返し吐露して、先に挙げた第四段の御息所主体の(クセ)に つながってゆくのである。

後場では、第九段に、有名な車の所争いの場面が、葵巻から引用されている。

〔源氏物語・葵〕

よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めてみなさし退けさする中に、網代のすこし馴れたるが、下簾のさまざまとよしばめるに、(中略)「これは、さらにさやうにさし退けなとすべき御車にもあらず」と、口強くて手触れさせず。(中略)つひに御車ども立てつつつければ、副車の奥に押しやられてものも見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知らぬるが、いみじうねたきこと限りなし。榻などもみな押し折られて、すずなる車の筒にうちかけたれば、またなう人わろく、悔しう何に來つらん、と思ふにかひなし。

〔野宮〕

ワキへ所狭きまで立て並ぶる、

シテへ物見車のさまざまに、殊に時めく葵の上の、

ワキへおん車とて人を払ひ、立ち騒ぎたるその中に、

シテへ身は小車のやるかたも、なしと答へて立て置きたる、

ワキへ車の前後に

シテへばつと寄りて

地謡へ人びと轅に取り付きつつ、人賜ひの奥に押し遣られて、物見車

の力もなき、身の程ぞ思ひ知られたる。……

梗概書類とも比較してみると、それらによつたものではなく、原典からの直接の要約であることが知られるが、ここではもうはっきりと、正体をあらわした後シテ御息所その人の、回想のかたちをとつた引用である。

したがって、傍線部のように、葵上方の乱暴に抵抗した従者の言動が、それも御息所の感情を反映したものではありません、『野宮』では、「身は小車のやるかたもなし」という屈折した、御息所主体の言動に移し変えている。

しかし、何百年も時間の堆積が、御息所の外に向かう感情をやわらげ、「身の程」(この表現は、御息所の詠歌「影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるる」によるものであろう)を思い知らせ、「報ひの罪」を観じさせている。

## 五 九月七日の意味

最後に、全体の構成について一言したい。

『源氏物語』賢木巻の関係分は、次のような柱から成っている。

I 源氏、野宮訪問を決意(「つらきものに思ひはてたまひなむもいとほしく……」)

II 野宮の風情(「はるけき野辺を分け入りたまふより……」)

III 対面―柵の歌の贈答(「北の対のさるべき所に立ち隠れたまひて……」)

IV 源氏の慰留に御息所の心乱れる(「心にまかせて見たてまつりつへく……」)

V 暁の別れ(「やうやう明けゆく空のけしき……」)

VI 御息所の嘆きつもの(「御文、常よりもこまやかなるは……」)

VII 桂川の被え(十六日、桂川にて御被したまふ……)

VIII 伊勢下向途次、和歌の贈答(「暗う出たまひて……」)

これに對して、『野宮』第三・四段の前シテによるこの数場面の紹介は、次のような順序でおこなわれている。

〈第三段〉

〔掛ケ合〕…III(その時いささか持ち給ひし柵の枝を、忌垣の内に挿し置き給へば……)

〔上げ哥〕…II(ものはかなしや小柴垣、いと仮せめのおん住まひ……)

〈第四段〉

〔クセ〕

I(辛きものには、さすがに思ひ果て給はず)

II(遥けき野の宮に、分け入り給ふおん心……)

IV(情を掛けてさまさまの、言葉の露もいろいろの……)

VII(その後桂のおん被ひ……)

VIII(行くへも鈴鹿川、八十瀬の波に濡れ濡れず……)

第三段には、「長月七日」が三回、「けふ」が四回も使われている。それほど、能の御息所にとって、この日は記念すべき一日であった。なかでも忘れられないのは源氏が御簾の内にさし入れた柵の枝をめぐる和歌の贈答で、前述のとおり、これが最初に回想されている。この贈答をきっかけに、気まずかった二人の心が通い合い、「来し方行く先」を思つてともに「おぼし乱るる」IVにつながる、最も濃密な時間の始まりであった。

『物語』では、翌朝の別れの場面を併せて、IIとVが(野宮の段)を形成する。ところが『野宮』では、この有名な(暁の別れ)この語、寄合語でもある(Ⅴが、前シテの回想から欠落しており、ⅣのあとはⅦへ飛躍する。それにくらべて、源氏のはるばると嵯峨野を分け入って御息所を訪ねるくだりⅡが、原典にかなり「密着」したかたちで、とりこまれている。

要するに、『物語』では永遠の別れのための訪問であった「九月七日」が、同じく翌朝の別れをひかえているとはいえず、それでも、長く訪れのなかつた源氏がや々と来てくれたことの喜びが上まわって亡霊に記憶されている一日として、設定されているのである。

抜け落ちたVの場面からは、しかし、別れにあわれを添える松虫の声とひややかに吹く風と（「風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、そり知り顔なるを」）が、結末近くの第十一段（ノリ地）の地謡に引かれ、

露打ち払い、訪はれしわれも、その人も、ただ夢の世と、古り行く跡なるに、たれ松虫の音は、りんりんとして、風茫茫たる、野の宮の夜すがら、懐かしや。

それらが『物語』では暁という時間に配されていたことによって、「夜すがら」語り、舞う亡霊が、姿を消さなければならぬ時の近づいていることを、『物語』の読者でもある観客には暗示しているのである。

注

(1) 『能本作者注文』いろは作者注文』『歌謡作者考』『二百拾番謡目録』など。なお、『自家伝抄』は、「世阿弥百七拾九番」の中に、「野宮但異作」とする。

(2) 『日本文学史3 中世』(至文堂、一九五五年刊) 第十章劇文学。能勢朝次『能楽源流考』(岩波書店、一九三八年一月刊) も「曲柄詞章も又すぐれて戻るから、世阿弥作とすべきである」とする。

(3) 「野宮」(『観世』29ノ9、一九六二年九月。『能謡新考』所収)。香西以後、日本古典文学大系『謡曲集下』(岩波書店、一九六三年二月刊)、『総合新訂版能楽全書』第六卷(東京創元社、一九八一年八月刊)所掲「能現行曲一覽」なども不明とする。

(4) 『金春禅竹の研究』(赤尾照文堂、一九七〇年一〇月刊)。

(5) 「世阿弥の構成論・作詞論から見た「野の宮」「定家」」(『能研究と評論』1、一九七二年二月)。

(6) 「源氏物語」と中世芸能(統)』(『専修国文』27、一九八〇年九月。『中世演劇の諸相』所収)。

(7) 「源氏物語」と謡曲」(『解釈と鑑賞』48ノ10、一九八三年七月)。

(8) 「能と源氏物語」(『観世』40ノ2、一九七三年二月)。

(9) 山中智恵子「高宮志」(大和書房、一九八〇年一〇月刊) 所掲「高宮表・高宮関係年表」参照。

(10) 拙稿「人待つ女」の「今」と「昔」——能『井筒』論」(『皇学館大学紀要』18、一九八〇年一月)。

(11) ただし、今川範政『源氏物語提要』(『源氏物語古注集成』第二卷〈桜楓社〉)などは、「源氏御ころにはふかく覚しめさねとも、此みやす所は度々怨霊に成給へは、もし又、業上などへつかれてはいかゝと覚しめして、野の宮へもたつねとふらひ給ふ也」とする。

(12) 「物語」では、「彼と彼女のかなしみをそのまま表現することをしないで、そのかなしみをあくまでとのえ「ものあはれなり」と表現することによってそれを感じさせようとしている」(根来司『平安女流文学の文章の研究』(笠間書院、一九六九年一〇月刊))。

(13) 野村精一は「作者、語り手、聴き手、読者、…のすべてにわたって、同時にその感性をゆさぶるという機能を帯びて、ここに置かれたことばなのである」という(『野宮のわかれ』(『講座源氏物語の世界』第二集『有斐閣、一九八一年二月刊』))。

(14) 河内本・別本系諸本、「七月八日の程」「十よ日のほど」などとする。また、梗概書・奇合書の類では、『源氏物語抜書抄』が「長月七日ばかり」



とするほかは、「九月七八日」(『源氏大鏡』『光源氏一部歌』等)「九月十六日」(『源氏小鏡』『源氏物語提要』『光源氏一部連歌寄合之事』等)などが多い。

(金沢大学文学部講師)

〔付記〕本稿は、金沢古典文学研究会一九八二年一月例会での口頭発表をもとにまとめたものである。席上、いろいろと有益なご教示を賜った故原田行造先生に深謝し、ご冥福をお祈り申し上げる。

五七七一③

## 雪華と加賀の精神風土

君がゆく越の白山しらねども  
ゆきのまにまにあとは尋ねむ

右は、十世初め頃に、加賀守として赴任する大丘千吉を見送った堤中納言輔の讃歌でも。覆雪に覆われた越の国は、盤鉢白山の名のもとに、当時の鄙びとを鋭拒せる聖域であったといえる。

現実には、雪深い任国での生活は、国司陪談の人々にとつて、ロマンチックなものではなかった。長徳二年(九九〇)に父為時と越前国の国府で冬を過ぎた紫式部は、これが京の邸で見た雪と同じものであろうかと驚恐し、一年余りで帰京している。その頃、都において雪の消えゆく姿は宮廷サロンでゲームの対象とされていた。清少納言が、中宮定子のもとで、白山の風世音に「これ消えませ給ふな」と本じつと、主殿司の官人に架かせた雪の山が消え残る日数をいあてる遊戯に興じていたのは有名な話である。

雪は天からの手紙である。とは、たしか郷土の生んだ偉大な科学者中谷宇太郎博士の言葉ではなかったかと思う。幽遠な庭園に、音もなく舞い降りる雪片は、極小の世界に端正な雪華を開花させ、遠い見知らぬ国からの便りを運んでくれる。あまりにも長文でひんぱんになると、「北越雪華」の強調する通り千辛万苦を強いことになる。

しかし、翻つて思うに、雪こそ加賀国の伝統的文化形成の触媒ではなからうか。まほゆい陽光の拡散する太平洋側帯の空間には、葉灰に過ぎるとさえ思われる丸谷焼のきらめく命の輝きも、幽暗な磁瓶たれこめる北陸の軒深い家屋の明り障子に、明浄な雪の反射する室内におしては、見事な調和を醸し出す。また、北陸地方に特有な赤壁も、沈鬱な空間の靄みを払拭する。更には、奢侈な加賀殿様も、静謐な部屋に優美なはなやぎを生み出す。

前田家の邸家(横家)、出身の母の血を引く三鳥由紀夫は、金沢に深い関心を寄せ、「美しい星」より冬の名品をのこしている。彼はその中で、「晴れた冬の室内との対照において、華やかすぎる丸谷焼や磁瓶のみが、装飾過剰な邸の趣向の冷たい豪華な文様にも、北国の人間の感受性を読みとっている。

降りしきる清浄な雪華の花びらの多くは、六舟体といわれている。その均齊美は、木々に施された雪溜りの幾何学的な円錐状の構図にも通ずる。また、宏大・幽遠・人力・蒼古・水景・眺望の六勝景を誇る兼六園の風雅なたたずまいをも象徴しているような気がしてならないのである。雪の季節を迎え、私たちはいよいよ雪を白魔と呼び白眼視することなく、雪国の文化が雪に交えられて来た節のいかに大きかったかを改めて自覚し、地方復権に邁進すべきであらう。